

平成30年度神戸短歌祭 (於)県民会館パルテホール

総会・講演「うたふ」ということ



第199号

題字 出口 草露
発行者 〒679-5322 佐用郡佐用町上石井685 安藤直彦方
兵庫県歌人クラブ
会計 〒657-0043 神戸市灘区大石東町4-3-1-305 福島妙子
振替 01110-5-6903
印刷所 ㈱ 甲南堂印刷



高橋睦郎氏の講演。質疑応答も含め2時間余りの充実した時間…

兵庫短歌賞
新人賞 加藤 直美さん
奨励賞 多田まどかさん
大江 美典さん
鈴木 裕子さん
渡辺 啓子さん

平成30年度神戸短歌祭は4月29日(祝日)午後1時より県民会館パルテホールにて開催。兵庫短歌賞・新人賞・奨励賞の表彰式と総会の後、高橋睦郎氏による講演「『うたふ』ということ」が行われた。

総合司会は鈴木裕子、上篠かける両氏。安藤直彦代表の開会の挨拶に続き表彰式。兵庫短歌賞は「六本目の指」加藤直美氏、新人賞は「焚火と月と蠟燭と」多田まどか氏、奨励賞には「あの夏の向日葵」大江美典氏、「境目」鈴木裕子氏、「ホトトギス啼く」渡辺啓子氏の三名が選ばれ、安藤代表より賞状が授与された。各受賞者の喜びの言葉の後、選考委員を代表し中川昭氏より受賞作品の評価を含めた選考経過報告があった。

次に、議長に芝本政宣氏を選出し兵庫県歌人クラブ平成30年度総会に移った。まず安藤代表より29年度の事業報告続いて福島妙子氏による会計報告、兼貞靖行氏の会計監査報告があった。続いて新顧問として藤井幸子氏が承認された。30年度の役員紹介があり、昨年度役員に加えて新屋修一氏が副代表に就任され、さらに事務局委員の紹介があった。引き続き安藤代表より30年度



総合司会の上篠氏(左)と鈴木氏

事業計画案が発表され、歌集批評会の継続など従来の活動をより充実させたいと述べられた。

休憩後、高橋睦郎氏の講演。高橋氏は歌は呼びかけるものとして、古典・西洋文学や時

平成30年度役員
代表(事務局長) 安藤 直彦
副代表 生田よしえ
事務局次長 小林 幹也
会計 新屋 修一
会計監査 三津野幸代
兼貞 靖行
委員 森嶋 郁子
藤本 朋世
石原 智秋
大西よし子
桂 保子
加藤 直美
廣庭由利子
藤岡 成子
藤本 則子
藤本美智子
矢内 温代
山田 千代文
吉野 節子



今年度の役員。
左から兼貞、福島、森嶋、三津野、新屋、生田、安藤各氏(小林氏は欠席)

代を超えた詩の世界を語られた。そして自作短歌、俳句、詩を披露され、その深みある声に参加者の心に響いた。

講演の後、新屋氏の進行により質疑応答。宇多喜代子氏はじめご来場の俳人・詩人の方々が会場の参加者との活発な質疑応答があり充実した会となった。

生田よしえ副代表の閉会の辞により午後4時半散会。参加120余名。(吉田千代美(講演の詳しい内容は2面に記載))

講演

「うたふ」でつらなひと

（詩人）高橋睦郎

高橋睦郎氏のプロフィール
一九三七年、八幡市（現北九州市）に生まれる。俳句・詩・短歌・新作能など多分野において日本語表現の可能性を探究。詩歌作品評論・エッセーなどの著作多数。読売文学賞・詩歌文学館賞・文化功労者など受賞。

本日の講演テーマは「うたふ」ということ。なぜ僕が歌を作り続けているか。についてお話をさせていただきます。ただし、僕の場合他の歌人と少し異なる事情があります。僕は詩歌に出会った少年時代このかた、短歌だけでなく詩と俳句も併行して書き続けています。ですから「なぜ歌を作り続けているか」ということは「なぜ短歌を手放さなかったのか」ということになりません。

十三歳の時に出会った詩歌

今から七十年余り前の一九四五年、戦後のできたば



若々しく明瞭な語り口の高橋氏

かりの新制中学に入りました。そこで、ある同級生に誘われて文芸部に入部しました。彼は小学六年生のときに論語を一字一句暗記していたばかりか、文学や映画・音楽などの造詣も深く、神童の誉れが高く、おまけにもすごい腕力の持ち主でした。半ば強制的に文芸部に入部させられたというのが実際のところ。『文芸』のなんたるかも全く知りませんでした。

中学と言っても、かつての小学校に間借りしていたのが実情。文芸部の部室も二畳の畳敷きの部屋であり、先生方といます。このことについていくつかのキーワードを掲げてご説明します。

「うたふ」訴ふ まず、「うたふ」の語源は「うたふ（訴ふ）」であると言われています。つまり「うたふ」ということは他者に向かって心中を訴えること、言いかえれば、うたうことには、本来、訴える他者が想定されている。それは恋人であり、究極的には神だと思われま。ここから二番目のキーワードが導かれます。

【こゝへ来】「こゝ」は「恋」であり、その核心は、動詞の「来（く）」、その力行変格活用命令形の「来（こ）」だと思ひます。つまり、他者に向かつて「こちへ来い」と呼びかけることが「こゝ」なのです。独断と偏見を言え、動詞がいちばん機能する形は終止形でなく命令形です。なぜなら、言葉は本来、他者に向けて発せられるものであり、とりわけ動詞の場合は、相手に対するメッセージや懇願を担うものです。つまり、「こちへ来る」という客観的な終止形の「く」よりも命令形の「こ」の方が先に発せられたのではと思ひます。

この重要な「来」から派生した「恋」こそが、詩歌の基本だと考えます。「恋」は発生的

が持ち寄った百冊足らずの本が置かれていました。その中に呉茂一の訳詩集「ギリシア抒情詩選」がありました。何気なく開いた私の目に言葉が飛びこんできました。そこに書かれた詩の言葉の魅力に囚われたというか、魅惑・蠱惑されたのです。田舎の十三歳の少年のまつさらな心に消し難い刻印がなされたと言えます。これが僕にとつての詩歌の目覚めでした。呉茂一という人は、類まれな言語感覚をもった「学匠」でした。『学匠』とは学者であつて同時に詩人、詩人の資質を持った学者のこと、今やもうめずらしい人です。古代ギリシアの詩の心をギリシア語で読んで享受し、それを日本語にうつすことでもう一度蘇らせた詩、まさに感動的な出会いでした。ではその翻訳はどういう日本語であつたのか。例えばサッポアの詩の翻訳は文語体で、「山嵐が／椋の木並に／ふきくたつやう／戀よこの／むらぎも／の／心とよもす」です。僕が「むらぎも」という言葉に出会つたのは、日本の詩歌ではなく、ギリシアの詩の翻訳だつたのです。古めかしい日本語というより、ハイカラな気分をもちたらずものとして出会つたわけです。僕にとつては

には、神と人との間の恋です。神から人（巫女）へ、人（巫女）から神へ、そしてその応用として人から人への恋がうたわれるわけです。この「こゝへ来」の構造を見事に示しているのが、万葉集巻頭第一首目の雄略天皇の歌です。「籠もよ。御籠持ち、鏡もよ。御鏡持ち、この丘に、菜摘ます子。家告らさね。名告らさね。そらみつ 倭の国は、おしなべて 吾こそ居れしきなべて 吾こそ居れ。吾こそは告らめ。家をも 名をも」。この歌は雄略天皇が道端で出会つた女性に呼びかけたものとされていますが、本当は神と巫女の声に出しての応答、「魂呼ばひ」の歌と考えられます。ともあれ、ここからさらに三つ目のキーワードが出てきます。

【よむべし】「よむ」というのは、つくづく不思議な日本語で、見事に両義的な意味を持つています。歌を詠むと書くように歌をつくることを指しながら、同時にまた作られた歌を読み享受するという意味があります。それらの元にあるのが「呼ぶ」です。対象たる魂に「こちへ来てほしい」と呼びかける第一の「よむ」があり、ついで歌の中にこめられた魂に読者が「こち

明石短歌会

明石公園内会議室
毎月第一・三木曜日
連絡先 田岡弘子
〒673-0845 明石市太寺四ノ一ノ三〇
☎〇七八九二二二六七三

明石大門短歌会

野瀬 昭二
明石市立勤労福祉会館
毎月第一土曜日
連絡先 伊藤敦子
〒673-0011 明石市西明石町
四一七二一
☎〇七八九二七二四四三九

芦屋水甕短歌会

歌会（PM13:30～4:00）
第2土曜日（芦屋市民会館）
第4金曜日（同上）
連絡先 〒663-8123 西宮市小松東町2-1-3-401
☎(0798)43-6820 加藤直美方
事務局 〒659-0042 芦屋市緑町1-16-102 藤本潮子方
近くの方の御参加歓迎します

小野短歌会

松尾 鹿次
代表 芝本 政宣
副代表 阿尾日出子
会 計 藤井 久子
事務局
〒675-1334 小野市大島町六二一
☎〇九〇一三八九五一五〇二二

海市短歌会

編集発行人 中川 昭
発行所
〒650-0027 神戸市中央区中町通三一―十五
神戸コーポラス七〇一
☎〇七八三七二一〇二三九
神戸支部
〒653-0813 神戸市長田区宮川町
四一八一―一三二三
明石多美子方

花鏡短歌会

石橋 妙子
〒651-0094 神戸市中央区琴ノ緒町3-2-24-603
連絡先 三津野 幸代 TEL(078)431-8665
〒658-0027 神戸市東灘区青木2-2-1-617
一運営委員一
安藤 池本 奥田 黒田 田口 長岡 中川 増井 水田 三木 三津野 山本
安藤 池本 奥田 黒田 田口 長岡 中川 増井 水田 三木 三津野 山本
みさよ 千富美 幸代 幸代 幸代 幸代 幸代 幸代 幸代 幸代

薫風

主幹 長谷川 正
入会金・添削料 不要
月刊会費 月1,700円
発行所
〒651-0077 神戸市中央区日暮通4丁目1-7
（サニーコート日暮202号）
TEL・FAX (078)221-0023
振替 01160-2-6567 薫風社

香寺短歌会

代表 岩田百合子
会計 景山 昌乃
連絡先 〒679-2151 姫路市香寺町香呂438
生田 よしえ
☎(079)232-4003

コスモス藍の会

小野はつね 小野 幸恵 久保 崇子
久米川孝子 黒田 富栄 田中 恭子
林野千代美 福井 弘子 水野 美子
三宅 幸子 山本 元子 弓岡あき子
〒671-0121 高砂市北浜町牛谷三八八
久米川 孝子

コスモス 加西勉強会

第2木曜日 13:00～ 中央公民館
第2金曜日 13:00～ アステシア加西
連絡先 〒675-2365 加西市畑町577
藤岡 成子
☎(0790)42-0415

コスモス 葛の花

会場 多可町八千代区 八千代プラザ
第2水曜日 午後1時
代表 〒677-0121 多可郡多可町八千代区 花の宮1171
岸本 しげ子
☎(0795)37-0680

紛れもないギリシアの詩であるとともに、紛れもない日本語の詩でした。もちろん、十三歳の少年が全てを理解できたはずはないのですが、理解を越えて詩の言葉に魅惑・蠱惑され、その刺激によって詩のようなものを書き始めたわけ。当時、貧しい暮らしの中で、母は僕のために「毎日中学生新聞」を取ってくれていました。その文芸欄に詩や短歌・俳句、それに作文まであらゆるジャンルの作品を投稿するようにになりました。いずれはどれかひとつのジャンルに収斂するものですが、僕の場合、収斂することなく、今日に至っています。

なぜ「うたふ」のか

そのキーワード
では、「なぜ歌を作り続けているか」という本題に入ります。実は、毎日のように作っているのが俳句です。俳句雑誌から作品を依頼されたら、沢山書きためたノートを開いて、どれを採ってどう並べるかが楽しみとなっています。次に多く作っているのが詩、現代詩です。短歌は作る頻度が最も低い。しかしながら、僕にとつて短歌をつくる意味が最も重く、僕の創作行為の全ての基本になっている

●短歌・俳句の潜在能力
 外国の人から「あんな短い形式では、表現したいものが表現できないのでは」と言われる。この初歩的な質問に僕は「いつも次のように答えます。「たしかに現代詩や散文の形をとらないと、表現できないものがある。しかし、現代詩や散文では表現できず、短歌や俳句だからこそ表現できるものがいっぱいある。そのポテンシャルエナジーが短歌・俳句にある。」

●俳句は決断、短歌は未練
 「五七五に七七をひつつけた短歌の形式は中途半端ではないか」と批判する俳人がいます。しかしながら、その中途半端なところに短歌の存在理由がある。卑俗な喩ですが、「もうあの男とは別れてやる！」と決断するのが俳句「でも別れられない…」と未練をひきずるのが短歌ではないでしょうか。とはいえ、未練が決断より劣るということにはならない。未練がなくて文芸などやってはいない。

●「短歌」という呼称に異議
 長歌に対しての「短歌」という言い方でしょうか、自ら「短い歌」と卑下するように言う必要はない。俳句を「短句」とは絶対言わない。他の言い方を考えるか、あるいは

「和歌」でもいいじゃないですか。

●俳句もまたダイアローグ
 短歌が伝統的に大事にしてきたのは「恋」であり、俳句にとっては「挨拶」です。「恋」は自己放棄して相手に向かうものですが、「挨拶」は自分をちゃんと保った上でのことです。つまり、俳句はモノローグに徹した上でのダイアローグなのです。

●声調は「こつこつ」でも可
 声調は必ずしも滑らかであればいいというものではない。ごつごつした方が良い場合もあります。いずれにせよ、声に出してみても自ずとわかることです。

●表現内容が形式を選ばず
 僕の場合、リズムも生理も違う短歌と俳句を一緒に作ることはできません。相当の頭の切替えが必要で。また、できた俳句を短歌に作りかえるなどという馬鹿なことはいけません。全く別物です。内容が形式を選ぶ、あるいは形式が僕を選ぶのです。

●「さるく」「のさる」「もだゆる」、ここから詩歌が…
 僕の郷里の北九州の方言では、目的をもって歩くのではなく、無目的にうろつくことを「さるく」と言う。詩歌の端緒はこの「さるく」にあり

に出すことは呼ぶこと・呼びかけることです。当面、その対象が不明だとしても、いずれ必ず誰かに届きます。そう信じたいと思っています。お手元にお配りした僕の作品を「声に出して」朗読しまして、本日のつたない講演を締めくくりたいと思います。なお講演というのは実は半分なのです。聴いた人がどんなふうを受けとめてくださったのかが大切であり、そこから質問や意見を出していただいで僕がそれに答えることで、話の内容をさらに深める…、そのきつかけが講演なのです。

※この後、高橋睦郎ご本人による自作の短歌・俳句・詩の朗読が行われました。若々しい声で淡々と朗読され、「目で読むことと違って心に直接ひびくもの・訴えてくるものを感じた」といった異口同音の感想が参加者から聞かれました。

質問タイムの回答集
 ※講演後、歌人クラブの有志及び、この日のために特別にご来場いただいた俳人・詩人の方々から質問が寄せられた。以下、高橋睦郎氏の明快な回答のいくつか、その要旨を紹介いたします。

「さるく」過程でなにかが来る、なにかがのしかかる、つまり憑依する、これを「のさる」と言います。その結果、「もだゆる」ということになります。悶え苦しむことは恍惚でもありますが、そこから生まれてくるのが詩歌だと思えます。「さるく」「のさる」「もだゆる」がなければ作品はできない。とりわけいかに真剣に「もだゆる」かが大事です。

●口語短歌に将来性はない
 僕は口語化には限度があると思っています。俳句なら、短いこと、切れ字・季語からの「縛り」、文語そのものからの「引き戻し」があります。恣意な口語化の拡散だけになって収斂というか、固まるということがないと、詩歌として成立しないのではないかと。短歌はこの「縛り」や「引き戻し」がますますなくなり、最近、ライトヴァースにすぎないものが増え、生まれてくる。そんな口語短歌の将来には希望が持てません。

【質問 発言者】(歌人) 安藤直彦・中川昭・江畑實(俳人) 宇多喜代子・大石悦子・山口昭男(詩人) 季村敏夫・時里二郎・鈴木漠各氏。
 (文責 藤本朋世)

平成30年1月21日新年会の記

1月21日、三宮のKICHIRIにて新年懇親会開催。参加者35名。司会新屋修一・廣庭由利子各氏。

安藤代表の挨拶のあと、ここ2年間に受賞された方々に、佐用町の蜂蜜を添えて花束を贈呈した。兵庫県文化功労賞 安藤直彦氏、半どんの会現代芸術賞 中川昭氏、日本歌人クラブ近畿ブロック優良歌集賞 たなかみち氏、藍綬褒章 小畑庸子氏、半どんの会文化賞 土居正氏、兵庫県ともしびの賞 来田務氏。

食事と歓談に続き、歌の穴埋めゲームとなった。既成の短歌2首のそれぞれ4句目と結句を伏せ、6つのチームに分れて競った。「短歌とは読んでくださるあなたへの(灯ともしごろの)愛の小包」石田比呂志。(竜宮の使いの)(春風ほどの)などの回答があった。毛筆の書写も美しく、場は盛り上がり、11時半よりの3時間余りは瞬間に過ぎた。(廣庭由利子)

受贈歌誌・会報等

コスモス姫路(飯田進)・海市(中川昭)・綱手(井上美地)・幻桃(幻桃短歌会)・ひめぢ水襲(小畑庸子)・花鏡(石橋妙子)・旅笛(角倉羊子)・文学園(下村千里)・白圭(内海永子)・とべら(尼子勝義)・夢(山根晴正)・但丹歌人(中島眞喜子)・礫(竹村公作)・六甲(志方弘子)・薫風(平井恭治)・茅花(前田昭子)・象(楠田立身)・津布良(兎田孝子)・丹生(兼貞靖行)・鶯が城便り(足立勝蔵)・波瀾神戸(保田ひで)・山の辺(高蘭子)・鮎(島崎榮一)・五

月風(藤井幸子)・すばる(すばる川柳会)・石川県歌人(石川県歌人協会)・詩と連句おたくさ(鈴木 漠)・時の川柳(平山繁夫)・風(日本歌人クラブ)・京都歌人協会会報(坂部昌代)・大阪歌人クラブ(田土成彦)・会報西宮歌人協会(井上美地)・埼玉歌人(御供平佑)・短歌 堺(小西美根子)・和歌山県歌人クラブ会報(水本光)・栞葉(栞葉出版)・長野県歌人連盟会報(松田康美)・大分県歌人クラブ(伊勢方信)・姫路歌人クラブ会報(小松力ツ子)・兵庫県現代詩協会会報(たかどう匡子)

ちへ来いよ」と呼びかける第二の「よむ」があります。ここにダイアローグが成立します。本来、歌はダイアローグなのですが、最近の歌はモノローグが殆どです。そうしたモノローグを生む孤独な状況はよくわかります。しかし、だからこそダイアローグを求めるべきというのが、僕のスタンスです。TSエリオットは、五百年前、千年前の先人たちがまるで目の前にいるように話ができること、それが詩人の証拠であると語っています。僕たちなら、例えば家持や人麻呂、実朝や定家といった人達と、錯覚であるとしてもそこにいるかのごとく対話ができること、それは同時代の恋しい人とのダイアローグと同じくらいか、それ以上に言語の世界でもっと大切なこと、失いたくないことです。僕が古臭い古語体にこだわるのはここに理由があるのです。もちろん、口語体でもダイアローグは可能でしょう。しかし、そのためには相応な思いがこめられなければなりません。「つたふし訴ふ」「こひ↓来」「よむ↓呼ぶ」という三つのキーワードに合う歌づくりに思いをこめることだと思います。一方、過去には興味はない、未来とのダイ

アローグができればいいという立場もあるでしょう。しかし、過去とダイアローグができないで、未来とのダイアローグができるわけがありません。さらに言えば、現在のだけかとのダイアローグを成立させるにも熟達した表現を要します。通り一遍のことはできて相手にも届くダイアローグはできないと僕は思います。【まなぶ↓まねぶ】前述の三つのキーワードにもう一つ足すとすれば、「まなぶ↓まねぶ」でしょう。歌の世界ではかつて「学ぶ」ことはすなわち「真似る」ことという場がありました。宮廷、国学塾、結社がそうでした。国学塾というのは実は「歌塾」です。本居宣長が師の賀茂直淵にしたように、自分の歌を師に送り、添削してもらおうというのが基本でした。これによって弟子は日本の詩歌の心を学び・真似ていくという形をとっていたのです。しかし、今日ではその伝統がうすれ、歌人の一人ひとりで学び・真似て、過去や同時代・未来とのダイアローグをめざすしかない。残念ながらそうです。

最後に強調したいことは、そのダイアローグが「声に出してのダイアローグ」であってほしいということです。声

に出すことは呼ぶこと・呼びかけることです。当面、その対象が不明だとしても、いずれ必ず誰かに届きます。そう信じたいと思っています。お手元にお配りした僕の作品を「声に出して」朗読しまして、本日のつたない講演を締めくくりたいと思います。なお講演というのは実は半分なのです。聴いた人がどんなふうを受けとめてくださったのかが大切であり、そこから質問や意見を出していただいで僕がそれに答えることで、話の内容をさらに深める…、そのきつかけが講演なのです。

※この後、高橋睦郎ご本人による自作の短歌・俳句・詩の朗読が行われました。若々しい声で淡々と朗読され、「目で読むことと違って心に直接ひびくもの・訴えてくるものを感じた」といった異口同音の感想が参加者から聞かれました。

<p>但丹歌人 (季刊)</p> <p>発行 但丹歌人会 代表 尾形 貢 編集発行人 中島眞喜子</p> <p>〒669-5229 朝来市和田山町宮438 ☎(079)672-2334</p> <p>運営委員 足立美津子 井上 澄子 衣川由弥子 高橋 博子 中島眞喜子 平野 君枝</p>	<p>流派を超えた短歌交流誌 楠田 立身 編集</p> <p>象 (SHO)</p> <p>入会歓迎 〒670-0843 姫路市城東町清水13-7-404 楠田方 ☎(079)285-1695 短歌ぐるうぶ象の会</p>	<p>創刊 宮 終二</p> <p>コスモス</p> <p>〒181-0001 東京都三鷹市井の頭1-2-17</p> <p>姫路支部</p> <p>支部代表 飯田 進 運営委員 新屋 修一 大西 恒祐 大西知永子 金砺 靖子 連絡先 〒671-2233 姫路市太市中678 飯田 進 ☎(079)269-0513</p>
<p>丹生 TANZYO</p> <p>主 張 生活写実を主体として真剣に作歌力を深めようとする集り 創 刊 昭和二十一年 代 表 兼 貞 靖 行 表 〒673-0424 三木市自由が丘本町2-232 表 ☎(0794)83-0803</p> <p>編集同人 井口通子・林 茂代・藤井貞子・前中 仁・兼貞靖行・上倉佐田子・山中洋子・山本樹一・土居きよ 〒673-0533 三木市緑ヶ丘町東2-11-5 山 中 洋 子 方 ☎(0794)84-0296</p> <p>事務局先 00950-9-195197</p>	<p>兵庫県内支社 神戸白珠の会 宝塚白珠の会 加東支社 淡路支社</p> <p>代表 白珠社 〒562-0001 箕面市箕面三十一 代表 安田 純生</p>	<p>佐用短歌連盟</p> <p>会長 安藤 直彦</p> <p>竹 菅 新 尾 船 グループ代表 田 原 家 上 引 貴 明 幸 艶 イ 節 子 男 子 子 子</p> <p>[連絡先] 0790(84)0150 新家 イサ子</p>

平成29年度 兵庫短歌賞

加藤 直美 (水甕)



1965年生まれ 西宮市在住 「水甕」所属 2012年第 二十三 回歌壇賞候補 2014年水甕賞受賞

六本目の指

・一斉に動力ミシン鳴り止めばランゲルハンス島の静けさ
・踏み終へてミシンは徐々に冷えてゆく
・許すといふは忘れることか
・ミシンといふ鉄の塊鎮もりて「存在する」といふ力あり
・縫ふときの縫ふことだけを思ふときあなたは海の青さへ還る
・ミシン踏み飛び散る音の中にあて蝸牛の殻に棲む君の声
・採寸をするとき触れる他人の肌密林のごとき湿りをもてり
・若草色の糸に積もれるやはらかき埃は過ぎし季節の時間
・針使ふ手元明るく照らされて丸めた背なは闇に預ける
・黒糸はどの色よりも重さうで少し傾く黒糸の柵
・黒糸より黒き喪服の黒の色死は生よりも僅かに暗い
・謝罪して下げた頭を戻すときとけ合ふどこかの海と空の青
・プロなれば待ち針使はず指使ふ時々

欲しい六本目の指
ダンヒルのスーツの深き海の青着る人知らぬその背は広い
バブル期のカシミアコートに怒り肩六千円でお直しします
ジーンズの穴を繕ふ星と星つなぎ星座を描くがごとく
飛び立てば飛べねばならぬあの枝まで
翼の形に鉄はひらく
ジーンズの青に真白きミシン目の涼しく揃ふ 夏が近づくと
店中の針を数へる午後六時太平洋に台風生るる
この夏がああ夏になる予感なく鉄研ぎぬる閑散期八月
漕ぎ出でむ青い月夜へ足踏み古いミシンは女のかたち

新人賞

多田まどか



1973年生まれ 加古川市在住 2016年兵庫短歌祭佳作 2017年短歌研究新人賞佳作 2018年河野裕子短歌賞入選

焚火と月と蠟燭と

・こうやって死ぬんだ私地の割れる轟音の中あきらめた明日
・激震の中で名前を叫んだ ただの友だつたはずの君の

奨励賞

大江 美典 (塔)



1985年生まれ 西脇市在住 「塔」所属 第十六回若山牧水青春短歌大会賞特別賞 第七回天神祭歌詠短歌賞加藤次郎賞 第一回あいらつ最優秀賞

あの夏の向日葵

・結局は咲けないままの向日葵が一年二組の私であった
・春の夜は蒼く遠くに透きとほりスカールカースト底辺にゐる
・淘汰されると知りつつ向かふ滑走路五月の風に押された背中
・その翅はあまりに薄く脆いから何処にも辿り着けはしないよ
・早旦の机に残った足形を拭ふ雑巾牛乳の香の
・昼休みトイレで食べるおにぎりは来る日も来る日もツナマヨでした
・嘲笑と悪意に溢れた教室を後にするとき細く息吐く
・橘くん 君だけだつたね「おはよう」と日毎私に言ってくれたの
・オニキスのやうな瞳を目で追へばノートの余白も一杯になる
・何よりも私の欲しい水色は君の外したコンタクトレンズ
・ほどかれてみたいと思ふ熱を帯びたあなたの柔きその指の腹で

奨励賞

鈴木裕子 (六甲)



1963年生まれ 高砂市在住 「六甲」に所属し短歌歴4年 2017年神戸短歌祭奨励賞受賞 2017年兵庫短歌祭知事賞受賞

境目

・ひねもすを母は寝たまま過ごしている時間が止まった陽のあたる部屋
・窓辺より射し入る光掬うのか布団の上にてのひら伸ばす

・今のこと忘れてしまふ母だけど新たに覚えた「星野富広」
・帰るわと言いつつ暮れなくて母のそば寝入るまで待つ暮れる施設に
・親しみを感じてしまふ浜田さん面会名簿によく見る名前
・スタッフの音が頭を駆けめぐる呼吸が苦しそうです、急いで
・ハンドルを握る両手は小刻みに左右に揺れる落ち着けわたし
・信号よ青に変われと祈る道どこでもドアがあればいいのに
・待っていてくれたの母さんありがとうたどえ私と解らなくても
・苦しげに大きく肩で息をする母を見つめる午前二時半
・もう一度呼ばれてみたい母の声夕食前の「裕子、ごはんやで」
・こんな時なんで思ひ出すんだらういつも半熟だった卵焼き
・生と死の境目これほど曖昧かぬくもり残るののひら撫でる
・体温の残る身体に寄り添いぬまだ行かないでまだ行かないで
・日常の見慣れた景色昨日との違いは一つ母いないこと
・認知症患ったこと知らないと言うがに微笑む遺影の母は
・歩くこと話することあの頃はできていたのだ写真に見入る
・動かない身体を置いて今頃は風になつていますか母さん
・携帯の待ち受け画面に笑まう母三年前の苑の桜と
・君も人恋しいのだから暗闇を照らす人感センサーライト

奨励賞

渡辺 啓子



1947年生まれ 神戸市在住 短歌歴 かなり長い 所属結社 無し 趣味 手仕事

ホトトギス啼く

・つつましく日々を過ごせる父母のいて庭の金柑ゆうべを灯る
・雨の止み枝に光れる水粒の零るのみの冬の静けさ
・父さんが我を捉えて(やあ来たか)言葉ではなく左手を挙ぐ
・「いま何時」死にゆく父の声はして「夕方五時よ」弥生尽日
・父はいま夢に在るのか手を伸ばし我にはみえぬ何かに縋る
・まだ私の声は聞こえているらしくいつもの仕草両手を合わす
・ぬばたまの闇のいずこに父の星あるや流星ふるという空
・我もまた南無阿弥陀仏と繰り返し低く誦しおりに合わせて
・約束の煙草を少し入れましょう帽子とともに父の傍ら
・天界へカサブランカと行きませよ念じて点火す喪主なる我が
・開け放つ窓の向こうに新緑の水木がそよぐ初七日過ぎて
・喪の家の窓にも穏しき陽の差してパ

「受賞つまった」

☆兵庫県ごとのとり賞 飯田 進
☆兵庫県ともしびの賞 来田 務
平成29年11月26日
平成29年12月2日

今号に掲載できなかった平成二十九年度兵庫短歌賞応募作品は次号にてその作品抄、選評を掲載の予定です。

平成29年度
「兵庫短歌賞」選考過程
高い評価の作品集
中川 昭

平成30年3月22日、兵庫短歌賞選考委員会は神戸市勤労会館で7名の委員出席の下に開かれた(小谷委員欠席)。応募総数は41、昨年より2作減。選考方法は昨年同様、委員が選ぶ総合点高点順に全作を審議。それを一次と二次はそこから絞り込まれた作品を集中的に審議。意見の対立はしばしばあったが、結果は次のように決定。

「あの夏の向日葵」の大江美典氏は「塔」所属の30代。遠い青春の日の陰惨な教室が舞台だが、チサの葉一枚の真実を求める声が胸を打つ。「境目」の鈴木裕子氏(六甲)は最多得点を集めて昨年に続く受賞で50代。認知症の母を看取る無心の姿勢から死を見届けるまでの心動きが切ない。「ホトトギス啼く」の渡辺啓子氏(無所属)は70代。限らない父への挽歌が素朴な味わいを見せて、父と娘の情愛の深さを垣間見る。なお22点を集めた「まずしき一冬」の矢野一代氏に対する期待の声が高かったことを付記しておく。

「あの夏の向日葵」の大江美典氏は「塔」所属の30代。遠い青春の日の陰惨な教室が舞台だが、チサの葉一枚の真実を求める声が胸を打つ。「境目」の鈴木裕子氏(六甲)は最多得点を集めて昨年に続く受賞で50代。認知症の母を看取る無心の姿勢から死を見届けるまでの心動きが切ない。「ホトトギス啼く」の渡辺啓子氏(無所属)は70代。限らない父への挽歌が素朴な味わいを見せて、父と娘の情愛の深さを垣間見る。なお22点を集めた「まずしき一冬」の矢野一代氏に対する期待の声が高かったことを付記しておく。

3月26日(月)、神戸市勤労会館にて開催。出席幹事26名。委任状21名。三津野幸代氏の司会のもと、安藤代表の挨拶に続き、議長に三津野幸代氏を選出

平成30年度第1回幹事会集刊行発送。編集三津野幸代応募総数221篇330部発行。「会報」第198号編集森嶋郁子、歌会会場広告51件担当山田文、発送部数850部

平成29年度兵庫短歌賞等点表
(評価順位を点数に換算)

作品名	選者名	安藤	尾崎	桂	小谷	小林	中川	藤岡	三津野	合計
あの夏の向日葵		8		9	9				7	33
境目		5		6		7	9	5	10	42
舟		7	10				2			19
白い薔薇		6			6	3				15
言葉よ、此れから貴様は俺の手下だ		10	5	2	4	4		6	5	36
千年を経て一建礼門院右京大夫集へ							8		9	17
ホトトギス啼く		9	1	7		5	1	8	8	39
まずしき一冬				8		8	6			22
六本目の指				10		10		10	3	33
焚火と月と蠟燭と			7	8	10		3		2	30

上位10番まで記載

選考委員

安藤直彦・尾崎まゆみ・桂 保子・小谷博泰
小林幹也・中川 昭・藤岡成子・三津野幸代

事務担当

吉野節子・山田 文・藤本美智子

兵庫短歌賞全応募者(到着順・敬称略)

(公募・ノミネート)

上村武男、大村博子、宮崎 浩、藤本太子、大江美典、奥田光子、尾崎順子、小畑恵子、鈴木裕子、嶋澤 隆、藤本美智子、辻本和美、森嶋郁子、中井今日子、西村 徹、高山葉月、大西弘子、山田 麦、山縣英祐、伊藤敦子、塩見俊郎、岸本万由美、渡辺啓子、長尾 宏、長谷川恵津子、中山敬子、知地一代、臼井てる子、福島妙子、矢野一代、船引貴明、三好美奈子、木南英子、福山裕恵、木下加代子、西村節子、上條とみ子、遠藤和子、石飛俊郎、加藤直美、多田まどか (41名)

④7月29日(土) 第9回歌集批評会。兵庫勤労市民センター。南輝子歌集『W A R I S O V E R』、西橋美保歌集『うはの空』45名参加
⑤10月30日(月)、ふれあいの祭典兵庫短歌祭実行委員会後、第2回幹事会
⑥11月18日(土) ふれあいの祭典兵庫短歌祭開催。於淡路市サンシャインホール。オーブニング恵比須舞(石屋恵比須舞保存会) 入賞者表彰、作品評講演「淡路島和歌の路」武庫川女子大学文学部教授影山尚之氏
⑦12月25日『年刊歌集』第57

平成30年度第1回幹事会(第3回幹事会)に続いて
◇30年度事業計画(主なもの)
①12月8日(土) ふれあいの祭典兵庫短歌祭、於加西市健康福祉会館ホール、表彰式・選考経過報告・講評。オーブニング「こども狂言塾」公演。催し「短詩型文学についてのシンポジウム」兵庫県政150周年記念。②年刊歌集間違いを少なくするための対策案考える。
③藤井幸子氏(水巻)を顧問に推薦
④新屋修一氏を副代表に選任

平成29年度 第3回幹事会報告

平成二十九年度

兵庫のうた 秀歌抄 『年刊歌集』第57集より

はじめに

改めて、短歌は読者と共有し合うことによって作品となることを思う。「よい読者に出会った作品は幸せである。それだけに、人の作品を「読む」ということには責任が伴う。「読む」ことは「詠む」ことにつながる。お互いよい読者でありたいものだ。この『年刊歌集』はそうした場であることを願う。

安藤 直彦

兵庫短歌賞選者が選んだ「わが注目した歌一首」(五十音順)
安藤 直彦選
月がきれいだから生きていける夜もあるああ長音にひそむかなしみ

普通の象徴のような月。嬉しい時はうれしいように、哀しいときはかなしいように。一首、柔らかな調べよろしく、月への情調が今し蘇って新鮮。

尾崎まゆみ選

行く手にはまろき夕月うす白しまだ間に合ふと歩をゆるめたり 足立 晶子
沈もうとしている夕月に、「また間に合ふ」を重ねて生まれる余韻。

桂 保子選

蒼穹にいきなりfinと浮き来すやふらんす映画のやうな昼ふけ たなかみち
柔らかな詠みぶりの(蒼穹にfin)の空想の奥の思いが切なく熱い。

小谷 博泰選

組織の中でええ恰好言っていた連中ら老いて杖もち野球観ており 河村 公美
「連中」に対する批判と身の行く末についての哀感とが共に感じられる。

小林 幹也選

雨傘をひらきて干しある足元に昨夜の雨粒こぼれて落つる 山本 圭子
描かれた雨粒が美しく、また、はかないもののように見えるところがよい。

中川 昭選

昼餉どき居場所を追われし老いたちの喫茶「ひだまり」吹きだまるころ 矢野 一代
「ふぎだまるころ」に行き場のない老人たちの縮図を描いて秀抜。

藤岡 成子選

松葉杖で一步一步と進むなりけたるさを吐き祈りを吸ひて 久米川孝子
三句切れ、また対句を用いた構成がいい。表現の背後に達観とも思える心が見える。

三津野幸代選

影ぼふしよ いつからかぼく気にかけて孤獨うすれて年を重ねる 宮崎 浩
悲しい時は肩を落とし嬉しい時は弾んでいる影を分身として詠む歌は多い。逆転発想が効いていて前向きな作者に拍手を送る。

惹かれた十首

浮田 伸子

- ①生き死にのすべてを透かせ金魚鉢読みかけの文伏せてよりゆく 石橋 妙子
 - ②核の火に灼かれし拳か八月の畑にゴージャ弾けていたり 青田 綾子
 - ③四つ折りに読みたる新聞知らぬ間にトランプ氏の顔抱きて眠る 石原 智秋
 - ④水鳥の去りたるあとに浮かびいる太陽だけでは淋しい水の面 伊藤佐重子
 - ⑤気まぐれに流すラジオのおほよそは音でしかなし心を病めば 岸本 寿代
 - ⑥聞くともなくきいているのは風の音空の涯てまで風吹く日なる 楠田智佐美
 - ⑦新型の補聴器「子音」を捉へたり右耳奥の蝸牛の吐息 小松カヅ子
 - ⑧服薬をときどき忘る さりながらその日は自力で生きたる身体 たなかみち
 - ⑨梅雨の間の窓のガラスに触れきたる揚羽の体裏の肉体感や 藤井 幸子
 - ⑩草むらに紙ひかうきの濡れてをりも一度夢へ飛んでみないか 牧野 秀子
- ①歌壇の重鎮の生き方にまで思いの及ぶ透明感。金魚にご自身の投影を読み取るのは深読みに過ぎようか。女流歌人の心をわしづかみにし県歌壇の牽引車。
②近藤芳美の影響を受け反戦歌を多く詠むがゴージャの実の朱をこのように視る作者に瞠目した。③車中ではよく見る四つ折り、抱いたのがトランプ氏だったから得た一首であろう。④太陽は母であるはずなのだが病を得て後の作者には「淋しい」と詠わずにおれない日々があったのだろう。元気なお声で安心しているが。⑤「音でしかなし」と言い切る。詠う覚悟が整った作者、自らがひきうけて詠いきる。⑥自然現象にさからわず境界を受け止める。「空の涯まで」が視たところ。⑦耳の複雑さは目のようにゆかないらしい「子音」のみから推し量って過ごす日々か。⑧「自力で生きたる身体」と捉える歌人の心意気に励まされる。⑨ものを視る角度が違う。生来の詩人の磨かれた感性にこそ動く。⑩楽しい呼びかけは若々しい感覚の持ち主。濡れている紙のもろさに人の気配を感じる。

日常

①パトカー、ゴミ収集車、郵便車連なりて行くいたくしづかに
 ②焼き終えし窯の片方にひっそりと陶器が己の炎を鎮めいる
 ③何の咎の鯛にありしやひとつらの「目刺し」に海の群青にじむ
 ④藻塩焼く炎にひかれわれもきぬ藤原定家が身をこがしたる浜
 ⑤枯れた葉に似せてその身を隠しつつアケビコノハの触覚ゆらり
 ⑥包丁の動きに細く長く垂るわが膝もとにしぶがきの皮
 ⑦みづからを焼べるとくにおとどうとよ落暉のなかを軽トラが去る
 ⑧仁王門入りて歩むは秋の街室町古刹時に溶けつつ
 ⑨誰が買つてゆくのだらうか赤い靴スパンコールが夏陽をはじく
 ⑩ペラルゴニウムの淡き色素を溶媒に溶かせば妻のシャツ干している

たなかみち 藤井 幸子 益永 典子 森垣 岳

①羅列した車の取り合わせがおもしろく音がたつてくる。結句「いたくしづかに」の事象の転換が巧みである。②対象を自らに引きつけた「己の炎を鎮めいる」の表現に深いものを感じさせる。③「目刺し」の群青色が美しく鯛の悲しみを伝えて繊細である。初句「何の咎」の主観的表現は賛否の分かれるところであろうか。④「藻塩焼く」「藤原定家」「身をこがしたる」の言葉が日常を優雅に表現した。⑤アケビコノハの名称と生態表現が珍しく自然科学の事象を文学的に成し、詩性もある。⑥柿の皮を剥く動作とその皮の様のみが描かれユニークで味わい深い。⑦一、二句の個人的な喩が印象的。老いた姉弟の情が深く伝わる。⑧秋の古刹に風情があり結句「時に溶けつつ」の把握が知的である。⑨口語表現と旧かな遣いで表された赤い靴が印象的。⑩四句から五句への転換にアンニュイ感がある。

藤本 則子

雪かづく八手の花にふたたびの真昼のゆきが花珠かくす
 紫木蓮の花芽ようやくふくらみて枝のあわいに昼月白し
 オリブの白き葉裏は翻り瀬戸のうしほはひねもすのたり
 プラタナス鈴の実となる花も去りいつかいつしか青き水無月
 落葉踏み林に入りて極月の土へと還るものの声聞く

中村美也子 中山みよ子 藤本 則子 宮本 玲子 山本みさよ

動物・植物

池本登代子

積む落葉犬と吾とが踏みゆけば心くすぐるやうな音立つ
 白詰草の花にかがめばベルム紀を知つておさうな蜥蜴の奔る
 行きかけてふと引き返す亡き母に話さなかつた花びらのこと
 オリブの白き葉裏は翻り瀬戸のうしほはひねもすのたり
 枯れ草の道ゆく足に絡みつく過去より伸ぶる緋色の蔓が
 かじりたる福島県産さくらんぼあれから何年生きたのだらう
 白人種なれば落とさざりしか原爆の忌日近づく赫き夾竹桃
 啓蟄で這ひ出た虫たち驚くかきしぎし地球がきしんでゐるよ
 花を待たず名もなき猫は消えてゐたどこかに戦の匂嗅ぎつつ
 雲にあらず雁にもあらず蟻にあらず人とは生れて仰ぐ秋空

大田富美恵 桂 保子 掃部伊津子 藤本 則子 真砂 晃美 鈴木 紀子 増井 定子 三好美奈子 安田 玲子 益永 典子

生活

藤井 幸子

幸せのかたち赤き金魚飼ひひとり住居の寄りどころとす
 鼠鳴きの雀と朝陽がカーテンにざざめきわの目覚めうながす
 風向きの変はりたるらしスミチオンの臭りをりわが庭に及ぶ
 草刈鎌かざすやり場のためらひにほたるの花は咲くなる
 セシウムを風を光を吸ひためて千切り大根ひしひし乾く
 茄子よりも高き糸のころ雄日芝に草刈り機の刃はねかへる音
 くれはとりあやとりしりとり生きてゆく雲雀上りの青空の底
 私には林檎の香る雪降らずさくさく朝の青菜を刻む
 雨の日の君の言葉はやや低し右の内耳の新型補聴器
 朝風はちちはほの匂ひ、夕風は夫の匂ひ 風に懐かる

石橋 妙子 楠田 立身 阿部 綾子 安藤 直彦 生田よしえ 浮田 伸子 尾崎まゆみ 加藤 直美 小松カヅ子 藤岡 成子

社会・政治

芝本 政宣

お年寄り敬う社会まもらんと幾多の星霜重ねる想い
 八月に必ずわれにのみがへる四文字熟語 灯火管制
 六千余のみ霊鎮めんレクイエム光はうたふ神戸ルミナリエ
 寒明けを木々の芽吹き香りくる右折の国の片隅にして

井戸 敏三 小畑 庸子 楠田 立身 土居 正

私の選んだ十首

自然

山本 圭子

葉桜の昏き下ゆく八瀬の里川なきところ水音する
 鈴生りの柿もぐ人の影もなく山家の秋はいよよ深みぬ
 立春の光を浴びて雀子は動きも軽く草の実拾ふ
 ほんのりと色づきそめし桃の実のひそむ葉かげに初夏の風吹く
 立ち枯れの葦に吹くかぜ音低く浮き寝の鳥を映す月影

池本登代子 香下 艶子 赤藤 緑 末澤千世子 武内 栄子

「こみは此処そつちじゃないよ」声かけてルンバ抱えるペットのよう

給油所なくなり暗き県道を自販機のあかり巡りを照らす
 受験勉強ばかりを強ひて子や孫に豆の煮方も教へてをらず
 暴飲のかの新宿の裏町もなつかしきまで老いしかともに
 低気圧荒れたる午後も夕刊は届きてあたりナイロンを被て
 J Aに眠る口座を解約し利息三円にぎりて帰る

岩田美代子 大谷 忠子 金治千恵子 中川 昭 浜崎 泰子 三宅 幸子

生・老・病・死

来田 務

死の近き金魚の体の傾きてをりをり鱗ふる力出しぬる
 ベッドより降りて四・五歩の排泄に凭るる負与の歩行器うれし
 バンザイ橋鉄骨となり村遠き施設へ今日は老いを渡しぬ
 情うすき私の半生たらちねの母にありがとつ言わぬままなり
 検査室の少し開きしドアの隙わが磨きたる夫の靴見ゆ
 捨てきれぬ夢の破片をあはせつつ解けぬジグソー老いを費やす
 深呼吸イーチ・ニーのあたりにて時間もるとも自分も消える
 目を閉ちて死出の山路を行くならめこの遠すぎる板との距離
 屈まりて庭の落葉を掻き寄すに音たえずなり朽ちゆくものは
 また一つ老いてゆくかと独り言言いつつ暮れの墓掃除する

石橋 妙子 野瀬 昭二 青田 綾子 足立 勝歳 黒田 富栄 清水 昭男 高井 忠明 中川 昭 濱 守 藤田つた糸

世態

石原 千秋

娶らざる人多き世に在りて生き易からむかわが長の子は
 孤独ではないと言いつつ切り孤独ではないと思えり夜の戸閉める
 受験勉強ばかりを強ひて子や孫に豆の煮方も教へてをらず
 高齢に限界超えた集落は案山子集めて賑わいおりぬ
 早朝のテロのニュースに地球儀を回せばかくるく回る地球儀
 終活をすべくアルバム取り出して思ひ出の中に埋もれて暮れぬ
 日本語の後に英語のアナウンス一輛電車に響き渡れり
 越しきたる幼の笑ひ泣く声が老いゆく町のカンフルとなる
 拜殿の防犯カメラの暗き眼にわがひたすらの祈り見らるる
 高齢者の後期となりたりけふよりは三猿の逆生きるとせむか

阿部 綾子 岩田美代子 金治千恵子 上月 昭弘 糺川 範子 田岡 弘子 松田 辰子 森嶋 郁子 山田 文 山田 政明

仕事の歌

新屋 修一

午後は雨と晴天の朝乙女言ひ十四時半に雨を呼び寄す
 清廉を褒めて悼みて懇ろに慰を呉れきなれの上司は

小畑 庸子 野瀬 昭二

愛・恋

西橋 美保

我が息子大手会社の管理職こころで「村入り」させねばならぬ
 産休の明けたる朝の保育室に園児を抱けば我が乳滲みき
 足音をききて野菜は育つとふ見廻る畑に大根太れ
 ちつぽけなゴールしかあらねども走るよオッサンは走る
 看護師が深夜見まわり点滴の目盛をそと照らしてゆきぬ
 きりの無き水かけ論に切りつけて主婦の仕事の買ひものに出る
 牛を追ひ月に耕し星に刈りし貧しき生計も今は恋しき
 風花とはまひるまの雪 空欄の目立つ解容用紙を重ねる

池本 俊六 大西よしこ 岸本しげ子 来田 康男 塩澤 文子 菅原 艶子 田中富美子 野田かおり

旅

伊藤佐重子

丸の内中央口が好きなのだシヨコラみたい甘い味のフォルム
 なだらかに海に向ひし菜の花の先は淡路の広らかな青
 夜明け待つ窓に鴉の騒めきてどどつと浮かぶ影桜島
 憧れし蔵王の山の頂きは銀砂となりて輝きてみき
 飛ぶ鳥もわれも旅人ゆく雲と春さむき日の峠こえゆく
 間歩といふ坑道ひくし縦横に蟻のごとくに人のいとなみ
 ねむの木の下により来て眠りたり熱帯の中の揺り籠涼し
 風無き無人の駅に降りたちぬただ独りなる気安さに居て
 大和なる興福寺の塔にかげおきぬ秋青空の一片の雲
 旅終るゆふべ明るき父と子の夏の記憶のひとつのあげは

大江 美典 岡本 博子 川端美智子 岸野 和夫 楠田智佐美 西五辻芳子 日向 海砂 松田 辰子 保田 ひで 安田 玲子

季節の移ろいに心を乗せて

中島眞喜子

五句三十一文字に情を叙すのが短歌の本来の謂であるとするなら、深遠無辺の情をいかに切りとりどりのようにスポットを当てるかが最大の関心事であり、表現の形も、直喩、暗喩、象徴、デフォルメ、古来よりさまざまな技法、修辭法が積み上げられ、今も実験的な試みが続いている。

しかし『年刊歌集57』の作品群には、凝りに凝った技法や修辭はほとんど見当たらない。物足りないとの評もあるが、私は素直でほのぼのとした作品に心ひかれた。春、夏、秋、冬、季節の移ろいの微妙な変化に心をふるわせ、自らの心のあり様を重ね合わせる。短歌ならではの自己表現の形なのではなからうか。また、夫や妻、子や孫を詠つたいわゆる家族詠も真摯な生きざまが垣間見えて楽しい。「孫歌」と蔑されることも多々あるが、今しか詠えない家族史の一齣として存在意義があると思う。

鳥瓜の花先もつれ夜の中へこんがらがりがりぬわたりしみたい
屋くらき櫛林にひびきくる冬を連れし溪の水音
雨上がりの朝の光を反射するガラス細工のような紅バラ
山茶花の紅・白・淡紅の花びらが折ふし零す冬の言の葉
雑木林にあふぐ空よりきさらぎの光レモンの色に乗りくる
冬空の青は深くて見上げぬるあなたと私は底の二粒
尾根いくつ越えれば山姥となるのやら薄に風がひょうひょうと鳴る

鎌谷 克子
楠田智佐美
濱 守
矢内 温代
足立 晶子
生田よしえ
伊藤佐重子
内海 永子
太田富美恵
加藤 直美

受贈歌集・歌書(兵庫県内)

☆『球体の声』 小畑庸子 11月 一般財団法人 角川文化振興財団 「身の上に心配ありて参上す」自爆を覚る球体の声 伊藤敦子
☆『印南野文華』 印南野平どんの会 11月 北羊館 帯青光る揚羽のもつれ来ぬ雨の止みたる庭の蝶道 坂井永利 1月 坂井永利
☆番外歌集『イタダキマスゴチソウサマ一九九五年』 吉岡生夫 1月 ブイツーソリューション みづみづと水たくはへし豊水に歯を

あてたればたちまちの秋
☆『佛手に遠き』 奥田洋子 1月 本阿弥書店 名に焦がれ植ゑたる仏手柑初なりの片手のひとつ佛手に遠き

☆合同歌集『石露』第6集 3月 香寺短歌会発行 花筏ひらきて水鳥すすみゆく後ろに細き水脈を生みつつ 岩田百合子

☆短歌作品集『猪名川』18号 3月 足立晶子短歌教室 一つやり一つ休んで丈低き物干し母の形が並ぶ 朝倉恵子

☆『年刊歌集』淡路歌人クラブ 3月 発行 清水昭男 色褪せしお地蔵様のよだれ掛け細かき縫ひ目は母の手仕事 清水昭男

☆『草食獣』第八篇 吉岡生夫 3月 ブイツーソリューション グアイとは川の意 決勝ラウンドの左右にウルグアイパラグアイ
☆『季節の手毬歌』 小谷博泰 4月 私家版 買ったニガウリの苗を植えておりが乾坤にくたびの夏

地区通信

【阪神】1月4日、堺市、利休と晶子ゆかりの記念館「利晶の杜」にて初釜祭、その後歌会を開催。1階は利休、2階は晶子に関する復元展示あり。出席は楠誓英氏・田中敦子各氏ほか数名。(吉野節子)

【神戸】11月25日、神戸市立産業振興センターにて海市本社集会開催。出席者中川昭・明石多美子・三井英美子各氏ほか。▼平成30年1月8日花の北市民広場にて文学圏新年会開催、出席者18名。▼1月30日、尼崎ホッピンにて花鏡新年会開催、出席者41名。▼2月4日、尼崎ホッピンにて関西潮音新年歌会開催。出席者木村雅子・木村光子・石橋妙子・三津野幸代各氏ほか40名。▼2月13日、文学圏運営委員会にて顧問・下村千里、発行人浮田伸子、編集人・青田綾子、会計・平野隆子各氏が選任された。▼4月4日生田神社にて曲水の宴が開催され、井戸敏三兵庫県知事・安藤直彦・中川昭・新屋修一・廣庭由利子・西橋美保・矢野一代各氏が参宴。題は「春」。▼4月12・17日、神戸さんちかホールにて第48回神戸まつ

り「神戸の百人色紙展」開催。中川昭・尾崎まゆみ・楠誓英・黒崎由起子各氏が出席。(黒崎由起子)

【明石】11月30日、明石市柿本神社にて「第159回柿本社秋季献詠祭」を開催。選者楠田立身氏。兼題「虫」、競点題「和」。出詠・祭典参列者、石飛俊郎・三宅隆子・伊藤敦子各氏。▼12月2日、明石市生涯学習センターにて「第44回明石市文芸祭表彰式」を開催。短歌一般部門の応募数261首、選者楠田立身氏。市長賞鈴木美樹氏。ジュニア部門の応募数1996首。選者田岡弘子氏。表彰式の後、選者の講評。▼2月3日、明石市「人丸花壇」にて明石大門短歌会(指導者野瀬昭二)・KCC短歌教室(指導者中川昭)関係者が参加し、伊藤敦子氏の歌集『蝶道』の出版祝賀会、併せて野瀬昭二氏の九十一歳を祝う会が開催された。司会は森嶋郁子氏。▼「明石ペンクラブ通信第13号」を発行。▼4月29日、鈴木裕子氏(六甲)は平成29年度奨励賞を受賞。(伊藤敦子)

【姫路】11月3日、姫路市民会館にて姫路歌人クラブ第28回合同歌会開催。出詠96首。小畑庸子・小松カヅ子・浮田

仲子・神保原廣己・久米川孝子各氏ほか61名出席。▼3月18日、姫路市民会館にて影山一男氏を迎え、コスモス姫路支部歌会開催。水野美子・久米川孝子・各氏ほか29名出席。(飯田進)

【東播】1月10日、茅花短歌会は、ふれあい交流館において新年歌会を開催。「茅花第186号」を発行。▼2月16・18日、稲美町ふれあい交流館のサークル発表会に短歌会全員の短冊を展示。▼4月11日、平成30年度総会を開催。平成29年度の事業報告・決算報告、平成30年度事業計画案・予算案が全員一致で承認された。「茅花第187号」を発行。(前田昭子)

【中播】11月9・11日、香寺短歌会は、姫路市公民館祭りに協賛して短冊出展。▼1月31日、市川市コミュニティホールにおいて「市川町新春短歌会」を開催。選歌と選評、小畑庸子氏。▼2月9日、姫路市まねき会館にて「小畑庸子氏第十歌集『球体の声』を読む会」を開催。小松カヅ子・藤本則子・楊井佳代子・生田よしえ各氏ほか54名出席。▼2月10日、神崎公民館にて「第12回神崎町文化祭」を開催。選歌と講評、小畑庸子氏。▼3月1日、香寺短歌会は合同

歌集『石露第6集』を刊行。編集生田よしえ氏。▼5月6日、「第38回明治神宮献詠短歌大会」において、吉永明代氏(水麩)佳作。▼5月20日、「第24回与謝野晶子短歌文学賞」入選、吉永明代氏(水麩)。(生田よしえ)

【北播】11月25・26日アスティアアかさいにて第51回加西市文化祭文芸祭開催。短歌応募数一般の部201首。選者春日いつみ氏、市長賞松末智行氏(加西市)、ジュニアの部応募数410首、市長賞繁田充貴さん。▼4月29日、西脇市高松町長命寺内宝光院にて第39回源三位頼政公奉賛献詠短歌大会開催。応募数83首。選考は北播各地区幹事14名。講師は三村時枝氏。特選第一席は吉崎笑子氏(多可町)。(芝本政宣)

【西播】3月17日、南光文化センターにて佐用短歌連盟春季短歌大会開催。来賓は、町長・議会議長・教育長・文化協会会長・文化の会会長・神戸新聞社。春季大会賞「もう二年経とうというに空き家より柱時計の打つ音聞こゆ(春江京子)」。安藤直彦・新家イサ子・菅原艶子・船引貴明各氏ほか27名参加。(安藤直彦)

人」創刊700号記念特集発行。▼2月15日、前田純孝賞学生短歌コンクール入賞者発表。応募5313首。選者佐佐木幸綱氏。▼3月6日、たじま文学のつどい企画運営委員会「たじま作品集第42集」発行。▼3月27日・4月11日、前田純孝賞学生短歌コンクール入賞者手書き作品展。▼3月末日、但馬高齢者生きがい創造学院短歌教室「翔第14号」発行。▼4月22日、朝来市大蔵市民会館にて竹柏会「心の花」主催「じろはつたんの里」歌会。▼5月16日、豊岡市民会館にて但丹歌人会主催「春の大会」開催。(足立勝蔵)

【淡路】11月、東浦短歌会年刊歌集『給水塔第42輯』刊行。▼11月下旬・12月上旬「淡路文学作品展」に淡路島内の短歌クラブより八十余首出品。▼12月、千鳥短歌会『年刊歌集ちどり22号』刊行。▼2月、淡路文化協会加盟団体「春の会員交流会」にて、二十首即詠披露。▼3月、淡路歌人クラブ『年刊歌集5』刊行。42名、掲載420首。▼5月、『すもと文化第12号』に七十余首掲載。「あわじ文化」に八十余首掲載。(島田英樹)

水甕姫路

隔月刊「ひめぢ水甕」

編集 小松カズ子
生田よしえ 藤井佳代子
発行 小畑 庸子
〒679-2131 姫路市香寺町犬飼366
079-232-2380

会計 安田 玲子
〒679-2132 姫路市香寺町須加院338-347
079-264-4664

姫路歌人クラブ

顧問 水野 美子 楠田 立身
代表 小畑 庸子
副代表 内海 守
会計 青田 綾子 飯田 進
監査 首藤 幸子 新家イサ子
事務局 〒671-2224 姫路市青山西四丁目五十六
西村 久代方
☎(079)二六七二七六七

とべら

(月刊)

代表者 尼子 勝義
発行所 赤穂短歌の会 とべら発行所
〒678-0163 赤穂市高雄1876-1 尼子方
☎(0791)48-0137

旅 笛

歌は人生の旅路に携える一管の笛

編集 角倉 羊子
黒崎由起子
小笠原明子

旅笛の会
〒178-0064 東京都練馬区南大泉2-23-8 梅村方
角倉 羊子
〒651-0052 神戸市中央区中島通1-1-25-102
黒崎由起子

文学圏

創刊昭和21年

顧問 下村 千里
集人 青田 綾子
発行 浮田 伸子
〒651-2276 浮田方
神戸市西区春日台1-8-1
☎(078)961-5676

編集委員 内山 嗣隆・岸本 寿代
宮脇 経子・山本 圭子
山本 君子・吉田千代美
計 平野 隆子

西脇短歌会

会長 藤中 光代
副会長 三村 時枝
藤本 勝子(事務局)
会計 高瀬満由美

事務局 〒677-0043 西脇市下戸田578
藤本 勝子
☎(0795)23-2377

林間阪神支社

伊藤佐重子 石黒 陽子
今西シゲ子 内井 幸子
倉橋 愛子 芝淵田鶴子
寺嶋 雅子 平木美智子
南 操子 吉村すゑ子

〒662-0844 西宮市川添町一―一四
芝淵田鶴子方
☎(079)八三六―一九〇七

ポトナム姫路支部

(姫路) 西門 和子
(佐用) 新家 イサ子

連絡先 〒671-2247 姫路市緑台1-7-1
糴川 範子

白圭

編集委員 内海 永子
鎌谷 克子
川上千鶴子
塩澤 文子
首藤 幸子

発行所 〒679-4003 たつの市揖西町小神297-1
内海 永子方
白圭社
☎(0791)63-4734

玲 瓏

[玲瓏の會]

塚本邦雄詩歌アカデミア追真的想像力の
飛翔を期するサンボリスムの殿堂

呈送簡要領見本誌
御希望の方は
〒262-0026 千葉市花見川区瑞徳二丁目1-1
ガーデンプラザ新検見川2-906
塚本 青史方
Tel/Fax 043-211-6704
http://www.imxprs.com/free/reirounokai/reirounokai

美加志保短歌会

創刊 昭和二十一年十一月

〒675-1304 小野市中谷町二二六七
編集兼発行人 山本 満代
☎(079)四六七一〇八二四

波濤神戸

発行人 保田ひで
発行所 波濤神戸支部
連絡先 〒653-0852 保田 方
神戸市長田区山下町1-5-15
☎(078)612-9294

吉田いのり 富岡 田 保田
経子 知子 ひで

昭和八年創刊 六 甲

代表 田岡 弘子
発行 明石市太寺四―一―一三〇
顧問 志方 弘子
編集委員 竹本 美屋子
石原智秋 牧野 秀子
青山俊代 黒川 明子
村瀬美雪 阿部 明子
西村 紀子 小島 和子
小田 弥生

水甕明石支社

左記で、毎月歌会を開いています
お気軽にご参加下さい

◇第一土曜日 午後二時より
◇場所 神戸医療生活協同組合
生協会館
◇連絡先 池本 俊六
〒651-2233 神戸市西区榎谷町福谷
六六八一―
☎(078)九九一―〇一五五

東浦短歌会

代表 片山 田佳子
毎月 第2木曜日 13時30分～
歌会
東浦老人福祉センターにて
会費 月 千 円

連絡先 〒656-2311 淡路市久留麻2346-6
片山 田佳子
☎(0799)74-2141

播磨国風土記と石仏の里 加西短歌 松田 辰子

今年の「ふれあいの祭典兵庫短歌祭は12月8日(土)加西市健康福祉会館で開催される。「花と緑のまち」加西市は兵庫県内陸部の田園都市。県立フラワーセンターには多くの人が訪れる。古い街並みや歴史的建造物も多いが、脚光を浴びている観光スポットを紹介する。

「顔が見たけりや北条の西の五百羅漢の堂に御座れ」古くから歌われている北条町羅漢寺に佇む石仏群がある。



微笑んでいる顔、悲しそう
な顔、もの言
いたげな顔。
見る人の心に
よって表情を
変える。その
作者も造られた意図も定かでない。500体ちかい、荒削りて素朴な石の仏は見る者の思いに添えてくれる。

奈良時代初期に編纂された日本最古の地誌「播磨国風土記」に加西市は賀毛郡として登場する。10余りの風土記ゆかりの史跡があり今にロマンを伝えている。中でも「玉丘古墳」は前方後円墳で陪塚も従えた広大な史跡である。三

「第10回歌集批評会記」 加藤直美

平成30年5月19日
(於) 兵庫勤労市民センター

今回で10回目を迎えた歌集批評会。岩尾淳子歌集『岸』と伊藤敦子歌集『蝶道』が取り上げられ、レポーターは小黒世茂氏と黒崎由起子氏、司会は尾崎まゆみ氏が担当した。はじめに岩尾歌集への評。歌の素材は形を淡く保ちながら外界とやわらかく溶け合い、そ

ここに実感が立ち上がってくる。岩尾氏の新鮮な短歌の世界が開かれていると述べられた。

- ・葦分けて水ゆくように制服の列にましろき紙ゆきわたる
- ・ほんのりと火星の寄せてくる夕べちりめんじゃこをサラダに降らす

作者からも、見えるものを描写することで、見えないものが表現できるのではないか、その方法のひとつが比喩であるとの発言があった。

次に伊藤歌集は、作者の人



前列左から岩尾、伊藤各氏
後列左から小黒、尾崎、黒崎、中川各氏

生の中で磨かれてきた感性が
確かな写真の中に表れており、
古典和歌への親しみ、家族へ
の思いの溢れた一冊であると
評された。作者からの野瀬、
中川両師への感謝の言葉が印
象的だった。

- ・夫釣れる眼張とあぶらめ平鍋に牛蒡とねぎをのせて煮てをり
- ・帯青く光る揚羽のもつれ来ぬ雨の止みたる庭の蝶道

最後に二冊を読み比べた感想が会場からも述べられた。

千鳥短歌会

山桜や紅葉に染まる山々。波荒く、
また風ざる瀬戸の海。渡る千鳥。
取り巻くすべてが歌心を誘う恵まれた環境にある短歌会です。月一回、第一土曜の午後行われる例会は活気に満ち、和気あいあいの楽しい雰囲気です。

代表 山田 恵子
〒656-0426 南あわじ市榎列大榎列
七五一―五
☎(079)九九四二二〇六二

茅花短歌会

短歌文学の鑑賞と作歌についての研修を行い、清新自由で個性に応じた作歌を目指します

毎月第二水曜日九時半よりふれあい交流館で勉強会
季刊誌「茅花」を発刊

講師 沼田 俊郎
代表 前田 昭子
〒675-1113 加古郡稲美町岡二六三〇
TEL (079)四九二―一七六六
FAX (079)四九二―一七六六

津布良

代表 兎田 孝子
編集委員 達 洋子
阿部ツヤ子

発行所 〒661-0046 尼崎市常松一―九―二九
松村 和子
TEL (06)六四三三―一五五三七
FAX (06)六四三三―一五五三七

潮 音

大正4年創刊

編集発行人 木村 雅子
〒248-0011 鎌倉市扇谷3-11-4
神戸歌会指導 石橋 妙子
〒651-0094 神戸市中央区琴ノ緒町3-2-24-603

連絡先 三津野幸代 TEL(078)431-8665
〒658-0027 神戸市東灘区青木2-2-1-617

幹事 増井 定子
三津野幸代
山本 美みち
安田千富美
島崎 三木 雅子

六 甲

シニールな印象の『岸』と、
写真の『蝶道』は一見全く違
うように感じるが、どちらも
きめ細かな感性の生きた歌集
で共通点も多い。このように
共通点や異なる点を探ること
は、歌の本質を読み込むこと
になり有益であると司会の尾
崎氏がまとめた。内容の充実
した批評会であった。出席43
名。

兵庫県歌人クラブ 年刊歌集第五十八集作品募集案内

作品 十首(過去一年間の自作、既発表・未発表問わず)・題を付す
様式 四百字詰め原稿用紙(A4判)二枚を用い、楷書で明記(右肩を綴じる
一行目に①題名 ②氏名(題名の下に書き、必ず「ふりがな」を付す)
二行目はあけ、三行目から③作品十首 ④二枚目末尾に所属結社
または団体名・郵便番号・住所・電話番号を明記

かな遣い 新・旧いずれかに統一し、歌稿右肩欄外に新・旧の別を明記

参加料 三千元(歌稿に同封して送金(切手代用不可))

資格 問わない(会員・非会員の別なく誰でも参加できる)

締切 平成三十年八月二十一日(当日消印有効)

送付先 新屋修一方 加古川市野口町長砂二二二七

兵庫県歌人クラブ年刊歌集刊行委員会まで
電話〇七九一四三二一五二六八

伝統文化体験フェスティバル

平成30年3月3日・4日、兵庫県公館

ふれあいの時間

新屋修一

三日の講座を藤岡成子氏が、四日の講座を、新屋がつとめさせていただくことになり、二人で資料を作成しました。例歌はそれぞれ好きな歌を使いたいという思いがあり、同じ構成で例歌の異なる資料を使うこととなりました。初日、受付開始から十分後のスタートということで、来場者が少ないのではないかと心配しておりましたが、フランスやベトナムから来られた日本語学校の生徒さん六名を含む十三名の参加があり、にぎやかで国際色豊かな講座となりました。講師の藤岡さんは、



実作中心に講義する藤岡氏

英語を交えながら丁寧に進めておられました。外国の方には講義の内容が難しいと判断されたり、予定していた内容を大きく変更して、実作中心の講義にスイッチされました。次々に歌ができあがり、板書しながら講評添削されていました。作り慣れている方もあるようで、ほとんど添削を要しない歌もあります。海外からの学生た

平成29年度収支決算報告書

自平成29年4月1日～至平成30年3月31日
(単位 円)

Table with 3 columns: 費目 (Expense Item), 金額 (Amount), 摘要 (Summary). Rows include items like 前年度繰越金, 会費, 結社広告費, etc., with a total of 3,316,826.

Table with 3 columns: 費目 (Expense Item), 金額 (Amount), 摘要 (Summary). Rows include items like 総会補填, 兵庫短歌賞(新人賞)補填, 年刊歌集補填, etc., with a total of 3,316,826.

上記の通り相違ありません 平成30年3月31日
会計 福島 妙子
監査 兼良 靖行



わかりやすく教える新屋氏

ちは、母国の海や料理を誇りに思う歌
母国と日本との繋がり、さらに深まる
ことを願う歌など、モチベーションの
高さをうかがわせる歌を作ってくれま
した。
二日目、外国の方はいませんが、百
人一首が好きだという小学生、子供連

れのお母さんなど十三名が参加してくれました。まず短歌の仕組みについて、続いて「短歌」と「和歌」の呼び名の変遷に絡めて短歌の歴史をお話ししました。その後、穴埋め問題や上の句と下の句を結び問題などで、楽しみながら短歌に触れていただきました。実作指導の時間がやや短くなってしまいました。実作が、思い思いに作ってくださった歌を少し手直しし、さらに良い歌にするためのポイントをお話ししました。ふだん俳句を作っている方の歌は、ほとんど直すところがなく、文芸には通じるものがあるのだと思わせてくれました。

◇余滴◇ 皆さまのお力により充実した紙面になりました。「年刊歌集」、兵庫短歌祭への参加をお待ちしています。
(藤本朋世・山田文・森嶋郁子)